

## お札になった文化人

日本銀行下関支店長  
岩下直行

### 1. はじめに

皆さんこんにちは。田中絹代ぶんか館の特別企画によるこそおいでくださいました。

本日は、小学生の皆さんと大人の方、両方に来て頂いていますが、小学生の皆さんは、普通の学校の授業のつもりでお話を聞いてください。大人の方は、小学生に戻った気持ちで聞いて頂ければと思います。学校の授業ですから、教科書が必要です。教科書はこのパンフレット「お金の話あれこれ」です<sup>1</sup>。一緒にお配りした海外のお札の資料は補助プリントです。当然、試験もあります。2003年の学習院大学・経済学部の入試問題（日本史）の問題【1】は、お札に描かれた人物をテーマとした出題です。難しい大学入試問題ですが、本日の授業を聞き、今日の教科書を読み進めば、かなり答えられるようになるはずですので、是非、授業終了後にチャレンジしてみてください。

### 2. 現在のお札に描かれた人物の共通点とは？

さて、今日は、お札に描かれた人物について説明します。現在、日本で使われているお札のほとんどは、2004年、今から6年前に発行されたものです。「お金の話あれこれ」の1ページを開いてください。ここに「新券の図柄」と書かれていて、その下に10000円、5000円、1000円の3種類のお札の表裏、合計6枚の写真があります。これが、皆さんが現在使っているお札です。ちょっと写真が小さいので、ここに3枚の大きなお札の模型を用意しました。皆さんはこの3人の人物が誰か知っていますか？ そうですね。一万円札は福沢諭吉、五千円札は樋口一葉、千円札は野口英世ですね。この3人は、もちろん日本を代表する歴史上の立派な人物なのですが、お札に描かれているのですが、幾つかの共通点があります。それは何だと思いませんか？



<sup>1</sup> このパンフレットは、日本銀行ホームページに掲載されています。  
ホーム > 情報の種類別 > 各種解説 > 銀行券等に関する解説 > お金の話あれこれ  
<http://www.boj.or.jp/type/exp/bn/are02.htm>

### 3. 明治時代に活躍した人物であること

ひとつは、明治時代に活躍した人だということです。大体、今から 100 年から 150 年前ということになります。正確にいうと、福沢諭吉 (1835~1901) は明治の前、江戸時代末期から活躍していますし、逆に野口英世 (1876~1928) は、明治の後、大正と昭和の初期にも活躍していますから、厳密には明治だけではないのですが、この人たちが生きた時代は、明治時代が中心でした。明治時代の前の江戸時代は、皆さんもテレビの時代劇や大河ドラマ「龍馬伝」なんかで見て知っていると思いますが、武士はちょんまげを結って、刀を差し、着物を着ていましたし、話し方も今とはずいぶん違っていました。それが、明治時代になると、着るものは洋服に変わりますし、刀は差さなくなり、髪の毛も普通になりました。話し方も現代とかなり近い言葉になってきます。明治時代というのは、時代が大きく変わり、現代の日本の基礎が形作られた時代なんですね。

明治時代以降の人物だということは、お札を作る側にとってありがたい部分があります。それは、写真が残っているということです。江戸時代中期以前にはカメラがありませんでしたから、歴史上いかに重要な人物でも、写真が残っていないんですね。肖像画、つまり絵が残っている人物の場合は、その絵を模写することもできますが、本物らしく描くのは難しいのです。過去に発行されたお札では、肖像画も残っていない人物の顔を、想像だけで描いたこともあったのですが、これまた無理がありました。お札に描く肖像は、できるだけ具体的かつ写実的なほうが良いので、やはりその人物の写真が残っていることは大切なのです。

### 4. 「文化人」であること

さて、この3人のもうひとつの共通点は、全員が「文化人」と呼ばれる人達だったということです。「文化人」というのは、「学問・芸術などの分野で活躍している人」のことで、例えば、学者、作家、芸術家などを指します。福沢諭吉は慶應義塾の創立者で、思想家・教育者ですが、沢山の本を書き、明治以降の日本に大きな影響を与えた人物です。樋口一葉は女流作家、つまり小説家です。野口英世は細菌学者で、病気の原因となる細菌を研究しました。いずれも立派な書物、小説や研究論文を残し、日本の文化を高めた人たちです。

実は、このような文化人がお札に登場するようになるのは、割と最近のことなのです。「お金の話あれこれ」の 15 ページを開いてください。真中に表がありますね。ここに、お札、つまり日本銀行券に登場した人物 16 人が、登場順に並んでいます。菅原道真、和気清麻呂、と難しい名前が並んでいます。このうち、「戦前」の 6 人と「戦後」の上 2 段の 6 人、聖徳太子が重なっているので合わせて 11 人ですが、これらは日本の歴史に

|       | 人物名   |
|-------|---|
| 日本銀行券 | (戦前)<br><small>すがわらのみちざね</small> <small>わけのきよまる</small> <small>たけのうちのすくね</small><br><u>菅原道真</u> 、 <u>和気清麻呂</u> 、 <u>武内宿禰</u> 、<br><small>ふじわらのかまたり</small> <small>しやうとくたいし</small> <small>やまとむすねのみこと</small><br><u>藤原鎌足</u> 、 <u>聖徳太子</u> 、 <u>日本武尊</u>   |
|       | (戦後)<br><small>にのみや</small> <small>せん</small> <small>とく</small> <small>いわくら</small> <small>とも</small> <small>み</small> <small>たか</small> <small>はし</small> <small>これ</small> <small>きよ</small><br><u>二宮尊徳</u> 、 <u>岩倉具視</u> 、 <u>高橋是清</u> 、<br><small>いた</small> <small>がき</small> <small>たい</small> <small>すけ</small> <small>い</small> <small>とう</small> <small>ひろ</small> <small>ふみ</small><br><u>板垣退助</u> 、 <u>聖徳太子</u> 、 <u>伊藤博文</u> 、<br><small>ふくざわ</small> <small>あき</small> <small>よし</small> <small>に</small> <small>と</small> <small>い</small> <small>は</small> <small>つ</small> <small>め</small> <small>せ</small><br><u>福沢諭吉</u> 、 <u>新渡戸稲造</u> 、 <u>夏目漱石</u> 、<br><small>ひ</small> <small>ぐち</small> <small>いち</small> <small>よう</small> <small>の</small> <small>ぐち</small> <small>ひ</small> <small>で</small> <small>よ</small><br><u>樋口一葉</u> 、 <u>野口英世</u> |
| 政府紙幣  | <small>じんこう</small> <small>こうごう</small><br><u>神功皇后</u> 、 <u>板垣退助</u>  |

登場する人物で、いずれも政治家、国の指導者に当たる人です（二宮尊徳は微妙ですが、彼もやはり一種の政治的指導者と位置付けられるでしょう）。

これに対して、「戦後」の下の2段にある5人は、いずれも文化人です。1984年、今から26年前に、福沢諭吉、新渡戸稲造、夏目漱石の3人による「D系列」と呼ばれるお札が発行されましたが、このお札は「文化人シリーズ」とも呼ばれました。肖像が、それまでの政治家から、文化人に切り替わったのでそう呼ばれたのです。1888年に発行された菅原道真の5円札から約100年間ずっと、お札には政治家の肖像が描かれていたのに、急にすべてのお札が文化人に切り替わったのですから、人々にとても新鮮な印象を与えたと言われています。

そして、2004年、今から6年前に、福沢諭吉、樋口一葉、野口英世の3人による「E系列」と呼ばれるお札が発行され、現在流通しているお札はほとんどがこの3人を肖像としたものに入れ替わっています。これで、文化人シリーズが定着したのです。

## 5. なぜ、お札に肖像が利用されるのか？

「お金の話あれこれ」の15ページ左下に「お札に肖像が利用される理由は？」というコラムがあります。これは大事なことなので、ここで解説しておきましょう。そこにはこう書かれています。

「第1は偽造防止のためです。私たちは人の顔を見分けることに慣れているため、銀行券の肖像がほんの少しでもずれたりぼやけたりしていると違和感を持ち、偽造防止に繋がります。

第2は人々に親近感を持ってもらうためです。その国で良く知られている政治家、文化人、有名人などを描き、その人物の業績などを再認識して親近感を持ってもらうとともに、銀行券自体についても認識を深めてもらう狙いがあります。」

第1の理由は、先程、写真の有無について申し上げたことと関係しています。実在の人物の写真があって、具体的かつ写実的な肖像が描かれていると、それをちょっと見ただけで、「ああこの人だ」と覚えているものなのです。これが、人物以外だとあまりその効果は期待できません。例えば、動物や建物ですと、ちょっと違っていても見分けがつかません。同様に、例えばハローキティや漫画の主人公のように記号的なキャラクターだと、これが多少ゆがんでいてもにじんできて、あまり違いを感じないのです。だとすると、偽札を作られても分からないかも知れません。この点、実在の人物の写実的な肖像であれば、偽札が作られても見破ることが容易という効果があるのです。

第2の理由は、やはりお札、お金というのは特別なものだという事です。考えてみれば、単にモノを買うときに使う道具ですから、単調な偽造防止の模様が描かれた紙であっても役には立つでしょうが、それでは味気なくて親しみを感じません。ここでも、人物を採用していることの意味がある訳ですね。一万円札を「諭吉」と呼んだりすることも珍しくありません。お金というのは、ややもすると冷たい印象を与えるものですから、せめて印刷される対象は少しでも親しみやすいものにしようとして、人物の肖像が採用されているのでしょう。

ある人が数年前に調査したところによると、紙幣を発行する国 175 か国のうちで、すべての紙幣に人物の肖像を採用している国が 118 か国、一部の紙幣のみに採用しているのが 11 か国で、合計 129 か国、全体の 73%の国が肖像を使っていたそうです<sup>2</sup>。残りの 46 か国、27%の国が肖像ではなく、建物や動物を使っていますが、偽造防止の点では若干不利になると考えられているようです。

## 6. お札の肖像の人物を選ぶ基準

そのような理由があるのであれば、人物の肖像を利用するのは良いとして、なぜもっと良く知られた人物を使わないのでしょうか。すべての人が見分けられるという意味でも、多くの人が親しみを感じるという意味でも、スポーツ選手やアイドル・タレントの方が有用のように思えますね。あるいは、現役の政治家やテレビで良く見る評論家や司会者では駄目なのでしょうか。

「お金の話あれこれ」の 15 ページの右下に「肖像の人物選定に基準はあるのでしょうか?」というコラムがあります。そこにはこう書かれています。

「お札に使用される肖像の人物選定に明確な基準があるわけではありませんが、注意が払われている点はいくつかあります。例えば、① 極力実在の人物で、業績があり知名度も高く親しみやすいなど、国民から尊敬され日本を代表するような人物であること、② 偽造防止の観点から、簡単に複製できず、かつ人の目を引く特徴のある顔であることなどです。」

このコラムの説明に個人的な見解を加えて、もう少し丁寧に解説してみましよう。海外の例も含めて考えると、お札の肖像は、現役の国家元首が登場するケースを除いては、既に亡くなった人物を採用することがほとんどであるようです。これは、どんな人でも生きているうちは、その評価が定まらないという問題があるためです。だとすれば、現在人気の高いスポーツ選手やタレント、現役の政治家をお札の肖像に使う訳にはいかないと思います。そうした現役の人物が、死後かなりの時間が経ってその評価が定まり、なお国民的な人気が維持されているのであれば、銀行券の肖像の候補になりうるでしょう。その場合、過去の時代の方々と比較され、選択されることになります。その意味では、その時々的人气、流行よりも、もっと長い、歴史的な視点でみた人物の評価が大切になると思います。

実は、明治時代は明確な基準がありました。1887年9月、「兌換銀行券人像描出の件」が閣議決定されました。そこでは、「本邦上古より、洪勲偉績あるものにして、万古にわたり衆人の敬愛仰慕浅からず」として、7名の歴史的人物の肖像を紙幣に採用することが決定されたのです。日本武尊、武内宿禰、聖徳太子、藤原鎌足、和気清麻呂、坂上田村麻呂、菅原道真の7名です。それが、「お金の話あれこれ」の 15 ページの表の「戦前」の人物とほぼ一致します。いずれも平安時代以前の古い時代の政治家や軍人、国のリーダーであり、当時の選定基準が良く分かります。逆に、当時現役であった明治時代の政治家は、この時点ではお札の肖像の候補にはなっていなかったのです。

<sup>2</sup> 植村峻、『偽札の世界史』、NHK 出版、2004 年

時代が降り、戦後になると、明治時代に活躍した政治家、例えば伊藤博文や板垣退助が採用されるようになりましたが、やはり政治家の肖像に限られていました。それが、今から26年前に、はじめて文化人の肖像が採用されるようになったのです。

## 7. 平和で豊かな時代の象徴

現在、皆さんがいらっしゃるの「田中絹代ぶんか館」ですから、ちょっと「ぶんか」にこだわってみたいと思います。現在の「文化人シリーズ」が採用されるよりもかなり以前、1887年の閣議決定を踏まえて、政治家がお札になるのが当然と受け止められていた時代には、「文化人をお札の肖像にしよう」と言ったとしても、とても受け容れられなかったと思います。小説家とか科学者の評価は、当時はそれほど高くなかったということです。

政治家とか国家のリーダーといった人々は、過去に戦乱が起こったり、国の統治が乱れたりした時に、大きな役割を果たします。日本は、明治時代に大きな政治体制の変革を遂げましたから、国内での勢力争いに勝ち、国を束ね、リーダーとなった人物に対する評価がとても高かったのでしょう。ところが、日本の政治が安定し、国民が豊かになった現代においては、自らがクリエイティブに新しいものを作り出す独創性にこそ価値がある、という見方が強まりました。その意味では、文化人がお札となったのは、日本の国が平和で豊かになった象徴のように思えるのです。

## 8. お札になった文化人たち

それでは、現在流通しているお札になった文化人が各々どんな人物であったか、簡単に紹介していきましょう。

### ① 一万円札：福沢諭吉

福沢諭吉は「明治時代の教育者、啓蒙思想家、慶應義塾を作った人」として知られています。塾と言っても学習塾や予備校ではありませんよ。現在の慶應義塾大学、東京にある私立大学のことですね。

福沢諭吉は学校を作ったのですが、その他にも色々なものを作りました。学校での教育を通じて人材を作り、人材を通じて明治の近代産業を作ったとも言えます。新聞社や雑誌社を作り、報道を通じて明治の社会思想や世論を作ったとも言えるでしょう。変わったところでは、西洋のファッション、つまり洋服の着方を詳しく紹介し、自分で洋服屋さんを作って国民が和服から洋服に移るのをサポートした、という話もあります。明治時代の「文明開化」によって、江戸時代までの古い産業や社会思想やファッションが一気に西洋化・近代化し、現在の私たちに繋がっていくのですが、その原動力となった人物が、福沢諭吉です。

意外と知られていないのは、現在、私たちが使っている言葉の多くが、福沢諭吉が作ったものだということです。「誰がその言葉を作ったのか？」という話には異説も多く、本当のところは良く分からないのですが、例えばインターネットで「福沢諭吉が作った言葉」をキーワードに検索してみると、実に様々な言葉が引っかかります。競争、自由、演説、議会、経済、社会、会社、財政、簿記、版權、新陳代謝、男女交際、多事争論、等々です。福沢諭

吉は、幕末から明治にかけて、様々な西洋の書物を日本語に翻訳する仕事をしていました。西洋の書物を読み解く中で、それまでの日本語にはなかった新しい概念を持つ外国の言葉に出会った福沢諭吉は、漢学の素養を活かして新しい言葉を次々に創り出してその訳語に充て、ベストセラーとなった多くの著書を通じてその言葉を広めたのです。

現在、私たちは、何の違和感もなく、そのようにして作られた言葉を使って話し、書き、読んでいます。私たちは、意外なところで、この一万円札に描かれた人物のお世話になっているのです。

## ②五千円札：樋口一葉

現在流通しているお札に描かれた3人の人物のうち、この樋口一葉だけは本名ではありません。本名は樋口奈津で、樋口夏子と署名していたこともあります。一葉というのは、小説家としての「筆名」なんですね。そこで、彼女はなぜ一葉と名乗ったのか、というエピソードをお話ししましょう。

樋口一葉のお父さんは江戸時代の武士でした。一葉が生まれたのは明治になってからですが、彼女は士族階級の娘として育てられ、裕福な家の子供が通う和歌の塾に通い、文学の勉強をしました。そこでの成績はとても優秀だったそうです。ところが、彼女が17歳のときにお父さんが亡くなってしまいました。その後、一家はとても貧しくなり、生活費を稼ぐために作家なろうとしたのです。彼女以前にはそんな女性はいませんでしたから、「最初の職業女流作家」とも言われています。

彼女が筆名として「一葉」を名乗ったと聞いたとき、彼女の友達が、「桐一葉の一葉ですか？」と尋ねたそうです。「桐一葉、落ちて天下の秋を知る」という中国の古典の一節から採ったのではないかと聞いた訳ですね。これに対して、「いいえ、蘆（あし）の一葉です。」と答えたという話が伝わっています。では「蘆の一葉」とはなんのことでしょうか。

皆さんは、ダルマさんを知っていますね。赤くて手足のない人形です。あのダルマさんは、昔中国に実在した「達磨大師（だるまたいし）」というお坊さんがモデルなのです。達磨大師は、インドに生まれて中国に渡り、禅宗の始祖となったという伝説の人物ですが、その伝説のひとつに、「蘆の一葉に乗って揚子江を渡った」というものがあります。この伝説は、昔の絵の素材として良く知られており、「蘆葉達磨（ろようだるま）」と呼ばれています。つまり、蘆の一葉に乗る人物はダルマさんということになります。そして、ダルマさんには足がありません。ここがポイントです。

樋口一葉はとても生活が苦しくて、お金がなかったのです。そして、お金のことを、俗に「あし」、「おあし」と呼ぶのは、現在でも残っている言葉です。お金がない⇒おあしがない⇒足がない⇒ダルマさん⇒達磨大師⇒蘆の一葉に乗っている⇒一葉、とつながるわけです。つまり、一葉という筆名は、生活の苦しさから生まれた名乗りだったと考えられるのです。そんな樋口一葉がお札の肖像となったことは、とても不思議な巡り合わせだと思います。

樋口一葉の生活が苦しかったことは、しかし結果として、彼女を作家として成長させたと言われています。樋口一葉は、東京の下町で苦しい生活を続ける中で、周囲の貧しい人々に共感し、彼らの生活をいきいきと描き出した作品を書くようになったからです。彼女が傑作

短編を次々に発表し、注目を集めるようになったのは23歳の頃です。しかし、僅か1年後に、24歳の若さで病死してしまいます。このため、お札の肖像に描かれた人物の中では、樋口一葉だけが飛び抜けて若いのです。

彼女の小説は古い言葉で書かれているので、小学生の皆さんが読むのはまだ無理でしょう。例えば、少年少女の淡い恋心を描いた傑作として名高い「たけくらべ」の冒頭部分をちょっと読み上げてみましょう。

「廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き、三嶋神社の角をまがりてより是れぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商ひはかつつつ利かぬ處とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまもをかし、」

使われている言葉が古くて難しいだけではなくて、句点（マル）がなくて、ずっと言葉が続いていく独特の文体であるため、大人でも読みにくく感じます。文庫本で50ページを超える小説なのに、およそ1ページに1個の頻度でしかマルが出てきません。皆さんの作文のお手本にはなりませんね。でも、こうして声に出して読み上げてみると、何となくリズムがあって、歌の文句のように聞こえませんか？ 皆さんは将来、国語の授業で「文語文」を読む勉強をしますから、その後に是非、この傑作小説を原文で読んでみて下さい。

### ③千円札：野口英世

お札に描かれた3人の人物の中で、小学生の皆さんから見て最も身近なのは、野口英世だと思います。野口英世は子供向けの伝記小説の常連で、偉人としての逸話に事欠きません。貧しい農家に生まれ、赤ん坊の頃の火傷で左手が不自由となったこと。小学生の時に、左手の障害を嘆く作文を書き、それがきっかけで手術費用を集める募金が行われ、手術を受けて左手の指が使えるようになったこと。この手術を受けたことをきっかけに医学を志し、苦学の末に医師免許を取得したこと。細菌学の研究者として身を立てるため、単身アメリカに渡り、研究所に勤務して多くの研究論文を発表し、3回もノーベル賞の候補となったこと。アフリカで発生していた熱帯性感染症「黄熱病」の研究のためにアフリカを訪れていた時に、自ら黄熱病に感染し、殉職したことなど、偉人・野口英世のエピソードは、皆さんも耳にしたことがあると思います。

ただ、残念ながら、野口英世の残した研究業績の中には、今日の科学では否定されているものが多いのです。彼は、光学顕微鏡を用いて病原菌の観察、研究を行っていたのですが、小児麻痺、狂犬病、黄熱病の病原体は、彼が特定したと主張した細菌ではなく、ウィルスであることが後世の研究で判明しています。ウィルスは細菌よりも小さいので、光学顕微鏡では見ることはできません。彼は細菌学者として優れた手腕を持っていたとされますが、彼が研究活動を進めていた時代は、「見つけやすい細菌を病原体とする病気」は既に研究されてしまっており、彼が研究対象としたのは「見つけにくいウィルスを病原体とする病気」でし

た。それらの病気の病原体であるウィルスを見極めるためには、より高倍率の電子顕微鏡の登場を待つ必要がありました。そうした技術的な制約の中で、彼は奮闘していたのです。

なお、野口英世という名前は本名ですが、実は成人してから改名したもので、子供時代は野口清作という名前でした。彼が改名をしたのは、明治時代に流行した、坪内逍遙（つぼうちしょうよう）の「当世書生気質（とうせいしょせいかたぎ）」という小説の登場人物である「野々口清作」のモデルと邪推されるのを避けるためであったとされています。

## 9. 外国のお札のデザインとその背景

これまでは日本のお札に描かれた人物について説明してきましたが、お配りした補助プリントで、海外の様々な国のお札のデザインを見てみましょう。

### ① アメリカ合衆国の通貨「ドル」

アメリカ合衆国の通貨であるドルのお札は、現在、1ドル札から100ドル札までが発行されています。お札の表面には、18~19世紀に活躍した大統領や政治家の肖像が採用されています。中でも有名な人物が登場するのは、1ドル札と5ドル札でしょう。1ドル札には、初代大統領で、アメリカ独立戦争において総司令官を務めたジョージ・ワシントン（1732~1799）が、5ドル札には、第16代大統領で奴隷解放宣言を布告したエイブラハム・リンカーン（1809~1865）が描かれています。

### ② 欧州の通貨「ユーロ」

欧州で流通しているユーロのお札には、人物の肖像ではなく、建物の絵が描かれています。しかも、これは実在する特定の建物を描いたものではなく、架空の建物です。

このようなデザインが採用されたのは、ユーロという通貨の成り立ちによるものです。2002年にユーロの紙幣と硬貨が登場するまで、欧州では各国が独自の通貨を発行していました。ドイツ、フランス、イタリアなどの国々では、各々の国の歴史的な人物や自国出身の文化人の肖像がお札に採用されていたのです。それらの通貨が統合され、新しい通貨であるユーロのお札を発行する際に、実在のどんな人物の肖像を採用しても、その人物とつながりの深い国とそうでない国があるため、公平に人物を選定することが難しいという問題が生じました。実在の建物や風景をデザインに採用しても、やはり公平性に問題が生じます。このため、どこにも存在せず、どの国も特別のつながりを持たないものとして、架空の建物がお札のデザインに採用されたのです。

とはいえ、欧州で使われるお札ですから、欧州らしさも大切です。そこで、「ヨーロッパのそれぞれの時代と建築様式」というテーマが選ばれました。お札の各額面に、古代から現代に至る各時代を対応させ、その時代にヨーロッパで建てられた建物の建築様式を参考に、架空の建物の絵を描くことにしたのです。どの額面のお札も、その表面には「窓」が、裏面には「橋」と欧州の地図が描かれています。例えば、5ユーロ札には古典建築の窓と橋が、50ユーロ札にはルネサンス建築の窓と橋が、500ユーロ札には現代建築の窓と橋が描かれているのです。

### ③ 南アフリカの通貨「ランド」

今年、サッカーのワールドカップの開催国となった南アフリカも、お札に人物の肖像を採用していない国です。南アフリカの通貨、ランドのお札には、5種類の額面各々に、サイ、ゾウ、ライオン、バッファロー、ヒョウという5種類の野生動物が描かれています。

南アフリカでは、かつて少数の白人が国を支配していた時代に、深刻な人種間の対立がありました。1990年代に全人種が参加する選挙が実施され、人種間の対立は和らぎつつありますが、お札に人物の肖像を採用するとなると、どの人種の人物を採用しても不満が出る可能性があり、そういう問題のない野生動物をお札のデザインに採用したものと考えられます。なお、南アフリカでは観光客が野生動物を観察するサファリ・ツアーが盛んであり、お札に描かれた野生動物は、南アフリカの重要な観光資源でもあります。

### ④ オーストラリアの通貨「オーストラリア・ドル」

オーストラリア・ドルのお札では、伝統的な国家元首（エリザベス2世）の肖像を採用した5ドル札や、先住民出身の文化人の肖像を採用した50ドル札など、多様な人物の肖像を採用しています。オーストラリアのお札の特徴としては、紙ではなくプラスチックの一種で作られていることがあげられます。

### ⑤ 中国の通貨「元」

中国のお札は、1元から100元まで6種類が発行されていますが、どの額面も、国家主席であった毛沢東（もうたくとう、1893~1976）という政治家の同一の肖像を採用しています。

### ⑥ 韓国の通貨「ウォン」

韓国のお札は、1000ウォンから50000ウォンまで4種類が発行されています。いずれも人物の肖像が採用されており、登場する人物は過去の国王、政治家、儒学者、画家です。

## 10. おわりに

今日は、お札に登場する人物を巡る様々なエピソードについてお話しました。日本のお札に登場する文化人たちは、現在の私たちにつながる立派な業績を残した偉大な先人たちです。是非、その業績を学び、彼らに親しんで頂きたいと思います。

御清聴をどうもありがとうございました。

以 上